

二〇二四年度 札幌大谷大学社会学部地域社会学科

一般選抜Ⅰ期

国語

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は8ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

Ⅰ 次の文章は荒川和久「新しい自分」を生む旅へ（『居場所がない』人たち 超ソロ社会における幸福のコミュニティ論』小学館新書、二〇二三年）の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で原文の一部を省略改変した）。

アイデンティティという言葉がある。自分が自分であること、さらにはそうした自分が、他者や社会から認められているという感覚のことを意味し、日本語では「自我同一性」や「存在証明」と訳されている。意識高い系の自己啓発セミナーなどで「これからのグローバル社会を生き抜くには確固たるアイデンティティを構築する必要がある」などといわれたりするが、そんなものはまったく必要ない。それどころか、確固たるアイデンティティなどむしろ害悪でしかない、と私は思う。

確固たるアイデンティティとは、いい換えれば「ブレない自分」ということにもなると思うが、何事にもブレないということは適応力がないということでもある。大地に根を下ろした巨大な大木があったとする。文字通り何物にもブレることなく、確固としてそこに①クンリンしている。しかし、そんな強固な大木も大きな台風などが来れば、その自分の巨大さと堅さゆえに倒れてしまう。風という環境に適応できないからだ。一方で、なよなよとした柳の木は台風がきても激しく揺れ動くことで倒れることはない。A大ききや堅さなどに勝手に固執し、風と真つ向から喧嘩して倒される大木と、弱々しく見えても風という困難をうまくいなして生き残る柳の木と、どっちが真の強者だろうか。

大体「ブレない人間」なんて面倒くさいだけだ。何を話しても聞く耳持たない頑固なじいさんがいたとしたら、多分多くは「老害」と思うだろう。それと同じで、そういう人ほど孤立する。

「自分らしく生きる」という言葉もある。そもそも、「自分らしさ」ってなんだ？ 自分とはこういう者であると本当に理解している人なんて存在するの？

「いや、私は自分のことを理解している」という人もいるだろう。が、そういうことをいう人間に限って、周りから自分について何かをいわれた時に「違う！ お前は俺の事を何もわかっていない」と怒り出すのだ。それこそが、本人自身が自分の事を何も理解していないと表明しているようなものだ。

自分が思う自分というものは、決して自分ではない。禅問答のようでわかりにくいかもしれないが、自分で自分をこういう人間であると思っていることは、あくまで【Ⅰ】的なものにすぎないのであり、【Ⅱ】的に自分を見た姿ではない。一方、他人がその人を見た場合には、外側に表出する表情、態度、言動、行動でしか判断ができないのだから、【Ⅲ】的ではあってもその人の【Ⅳ】までは判断できない。つまり、自分が思う自分と、他人が思う自分というものは決して同じになるはずがないのである。

俳優やモデルの人たちは、常に自分の姿をカメラがとらえた姿として認識している。同様に、歌手や声優も自分の声を客観的に収録した音声として認識している。しかし、一般人は、自分の顔の写真や録音した声を聞けば「これは自分じゃない」と思う人が多いだろう。「自分じゃない」と思うのは自分だけであって、他人から見れば「お前の顔だし、お前の声だよ」でしかないのである。

前述した「俺は俺の事がわかっている」などと豪語する人間に限って、写真も録音も嫌う。なぜなら、そこには自分が認めたくない自分の嫌いな部分があるからだ。しかし、本人が短所だと思っていることでも、他人から見ればそれが長所である場合もあるし、逆もある。

つまりは、本人が理解している自分なんて所詮「あなたという個人が主観で、見たいものしか見ないようにして作り上げた虚像」にすぎないのであって、そんなものを「自分らしさでございませう」なんて堂々といふ放つ時点で、「まったく自分のことがわかっていない」のである。むしろ、そんな虚像に取りつかれて、周りにその虚像を押し付けたりする人間の方が社会性が^㉒ケツラクしている。

つまり、「確固たるアイデンティティ」とか「自分らしさ」など無用なのである。

必要なのは、自分というものは決して唯一無二の存在などではなく、たくさんの自分の集合体なのであるという理解をすることである。

^a 十人十色という言葉がある。人はそれぞれ違うよね、という意味合いで使われるが、人間は決して一人一色ではない。^B 一人の中に多くの色を内包しているのである。

たとえば、あなたが^㉓無垢の真っ白の状態だったとしよう。そこに、赤い色を持った人と接続した。そうすると、あなたの中に赤の成分が注入される。黄色の人と接続すれば同様に黄色が注入される。しかし、白に赤が注入されたからといって、白と赤が混じり合ってピンクになるわけではない。絵具ではないのだ。あくまで、あなたの白の構造の中に赤の要素が付加されるのである。黄色もまた付加される。生きている間にたくさんの人と接続するだろう。そのたびに様々な色が付加されていく。それは決して混ざらない。が、モザイク模様のように、あなたの中には彩りができ上がっていく。わかりやすく説明するために単純化したのが、そもそも真っ白な人、真っ赤な人などという単色人間は存在しない。すべての人間は多種多様な色を持つモザイク型である。そうしたモザイク同士で接続することで、互いに違う色を取り込み合っていく。それが、^(注1)「接続するコミュニティ」における人のつながりの重要なところで、自分の中に新しい自分が生まれるというの、そういうことである。

そして、混合ではなく、それぞれがモザイクとして独立の色を放つがゆえに、組み合わせによって「新結合」という自己のイノベーションが起きるのである。何色にもなれるのである。

自分の中に生まれた新しい自分というものは決して古い自分から消えてなくなるものではない。上書きされるものでもない。一度取り込んだ、誰かによって生まれた「新色」の自分はずっと自分の中にある。だから、今ここで出会った誰かによって取り込んだ「赤色」と10年前、20年前に誰かに

よって、もしくは何かを読んだり、体験したりすることによって生まれた「旧色」とが反応して、「新結合」する場合もある。ずっと忘れていた感情が、ある人と話をする事によって蘇よみがえることとかあるだろう。ずっと聴かなかった思い出の曲をたまたま町で聞くことによって、当時の自分の状況を思い起こすこともあるだろう。

そうやって、人は何かの行動によって、その④都度自分の中に新しい自分ができているはずなのだ。それが自分の中の多様性であり、決して自分はひとつの自分ではないということを理解することが大切だ。

一期一会の人のつながりでも、たった一度の経験でも、それを通じて自分の中に新しい自分が生まれたのだと思えば、出会った人、経験したこととすべてに感謝の気持ちが湧いてくるだろう。

多様性の時代だのと口ではいいながら、その人自身がまったく多様性を認めないという矛盾した人物をよく見かける。それは、そもそも自分の中の多様性をまず認められていないからだと思う。

人生とは、長い年月に及ぶ経験や人とのつながりを経て、c 自分の中に新しい自分を生成していく旅なのだ。その自分の中にたくさんいる自分というものの存在を理解していればしているほど、自分というものはわからないということになるわけだが、それでいいのである。わかったつもりになって、勘違いして嘘の自分を生きるよりよっぽどマシである。

大体、人間なんて、環境が違えばその環境に応じた人間にならざるを得ないし、相対する人間によって態度を変える必要だってある。カメレオンでいいのである。誰に対しても主張も態度も何も変わらない人間なんて、ドクサイ者である。

(注1)「接続するコミュニティ」——著者が提唱する、これまで重視されてきた「所属するコミュニティ」に代わるもう一つのコミュニティのあり方。「接続するコミュニティ」は所属を必要とせず、時と場合に応じて柔軟に接続することで複数の相手とつながり、そのつながりから新たな自分を見つけることができるという。

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 傍線部 a 「十人十色」、傍線部 b 「二期一会」の読みと意味を記しなさい。

問三 傍線部 A 「大きさや堅さなどに勝手に固執し、風と真つ向から喧嘩して倒される大木と、弱々しく見えても風という困難をうまくいなして生き残る柳の木と、どっちが真の強者だろうか」とあるが、この問いかけによって筆者が主張しようとしていることは何か。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問四 【 I 】～【 IV 】には、「主観」か「客観」のどちらかが入る。「主観」が入る場合には a を、「客観」が入る場合には b をそれぞれ記しなさい。

問五 傍線部 B 「一人の中に多くの色を内包しているのである」とあるが、それを言い換えた言葉として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 確固たるアイデンティティ
- イ 唯一無二の存在
- ウ 自分の中の多様性
- エ 本人が理解している自分
- オ 外側に表出する表情

問六 傍線部 C 「自分の中に新しい自分を生成していく旅」とあるが、それはどのような旅だと考えられるか。あなたの考えを自由に記しなさい。

Ⅱ 次の文章は広田照幸「知識と経験」(『学校はなぜ退屈でなぜ大切なのか』ちくまプリマー新書、二〇二二年)の一部である。本文を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で原文の一部を省略改変した)。

少し違う角度から学校の知の意義を話しましょう。一つ目は、経験は狭いし、経験し続けるだけでこの世の中のいろいろなことを学べるほど人生は長くない、ということですよ。

十九世紀ドイツの「鉄血宰相」と言われた^(注1)オットー・フォン・ビスマルクが、「愚者は経験から学ぶ、賢者は歴史から学ぶ」と言ったと言われています。正確には少し違うようですが、なかなか味わいのある言葉です。

愚かな人は自分が経験したところから学ぶ。賢者はほかの人の経験、すなわち、歴史の中の誰かの成功や誰かの失敗、そういうものから学んで、自分の目の前のことに生かしていく。そういう意味の言葉です。

身近な問題を日常的にこなすためには、多くの場合、自分の経験だけで大丈夫かもしれません。しかし、身近なこれまでの自分の経験だけではどうにもなりません。全く新しい事態にある問題について、考えたり、それに取り組んだりしようとすると、

たとえば、何年も商売をやっていると、商売のこつを覚えたりお客さんとの関係ができたりします。難しい言葉も文字式も、社会も理科も、そこには不要です。しかし、ある日、「今、自分たちの市で起きている再開発計画について、商店街のみんなまで対応を考えましょう」という話になったら、商売の経験だけでは対応できません。再開発計画の書類を手に入れて目を通したり、^①ホウレイを調べたり、みんなで議論をしたりすることが必要になります。それには、経験で身につけた日々の商売の知識やノウハウとは異なる種類の知が必要になるのです。日々の経験を越えた知、です。

あるいは、会社に入ってからどこかの営業所に配属されて、一生懸命に頑張っていたけれど、突然、「東南アジアに行って、工場を造る責任者をやれ」とか言われた場合を考えてみてください。田舎町での営業のノウハウでは対応できません。そこでも、今まで経験で身につけたことのない知が必要になります。

^(注2)ジョン・デューイという非常に有名な教育哲学者が『民主主義と教育』(岩波文庫、松野安男訳)という本の中で、次のように書いています。「経験の材料は、本来、変わりやすく、当てにならない。それは、不安定であるから、無秩序なのである。経験を信頼する人は、自分が何に頼っているのかを知らない。なぜなら、それは、人ごとに、また、日ごとに変わり、そして言うまでもなく国ごとにも変わるからである」(前掲書下巻、一〇頁)。ある人が経験するものは、たまたまそれであって、偶然的で^②トクシユ的なものなのです。

それどころか、個人の経験というのは、狭く偏っていたりもします。デューイは、次のように述べています。「経験からは、信念の基準は出てこない。なぜなら、多種多様な地方的慣習からもわかるように、あらゆる相容れない信念を誘発するのが、まさに経験の本性そのものだからである」(同右)。

つまり、経験は大事だけれども、それはどうしても狭い限定されたものでしかありません。しかも、経験から学ぶというときに、経験の幅を少しずつ広げていくには結構時間がかかります。少しずつ経験を広げたり、何度も失敗したりするために、人の人生はあまりにも時間が限られています。むしろ、文字による情報を通して、ほかの人の成功や失敗がどうだったのかとか、ほかの人の経験がどうなのかということを学ぶのが、てっとり早く「自分の経験」の狭さを脱する道です。ここでは、単に文字の読み書きができるというだけでなく、学校で学ぶ社会科や理科、外国語や数学の知識などが役に立つはず。何せ、学校の知は「世界の縮図」なのですから。

二つ目に話したいのは、^B知識があるかないかで経験の質は違うということ。知識か経験か」という【 X 】ではなくて、そもそも経験の質は、知識があるかないかで異なっているのです。

ここでも再びデューイの議論を紹介します。一つ目は、十分な知識があれば、深い意味を持つ経験ができる、ということ。デューイは、同じように望遠鏡で夜の星を見ている天文学者と小さな少年との違いを例に挙げて論じています（前掲書下巻、二六頁）。望遠鏡で見えている星は同じです。

だけれども、そこから読み取るものは全然違うということ。望遠鏡を覗いている小さな少年は、「赤く光る星がきれいだなあ」と思うかもしれませんが。しかし、同じ星を同じような望遠鏡で見ている天文学者は、「この光の色は、星の温度や現在の状況を伝えている。この星の色をどう考えればいいんだ」ということを考えながら星を見たりするでしょう。そこから、宇宙の謎が解明できるかもしれません。「単なる物質的なものとしての活動と、その同じ活動がもつことのできる意味の豊かさとの間の^③相違ほど著しいものはない」とデューイは述べています。

これは私たちもよくあることです。たとえば、海外旅行でどこか歴史的な建造物を見に行くという話になったときに、歴史を知っているか知らないかで興味の持ち方や見方が全然違います。歴史を知らない人は、「大きいな」とか、「古いな」とか、「壊れかけているな」とか、「人がいっぱいいるな」とか、そんなことを思いながら建物内を歩いています。それに対して、歴史を知っていて、なぜこの建物がこういう形で残っているか知っている人は、「あの物語に出てきたあの建物だ！」とか、「この柱は何やら様式で、何やら王が趣味で造らせたんだ」とか、そういうふう楽しんでみる人が多くいます。同じものを見ても質の異なる経験になる。知識があるかないかで経験の質が違うのです。

デューイが言っている知識と経験の話でもう一つなるほどと思うのは、まだ経験していないもの、これから何が起きるかといったことを考えるために、既存の知識が必要だ、と述べているくだりです。

デューイはそれをこういうふうに書いています。「知識の内容は、すでに起こったこと、終了し、またそれゆえに解決され、確実であると考えられているものなのであるが、知識の関係する先は未来すなわち前途なのである。というのは、知識は、今なお進行中のことや、これから行なわれようとしていることを、理解したり、それに意味を与えたりする手段を提供するからである」（同下巻、二一八頁）。私はここを読んで、「ああ、なるほど」と思いましたね。

デューイが挙げている例は医者例です。目の前の患者の症状、頭が痛いとか喉のどが痛いとか、既往症きおうしやうが何かとか、こういうのを全部総合して考えると、これはこういう病気でこれからこうなるから、そうすると④投与すべき薬はこれだとか、そういうふうに考えます。そのことをデューイは、「直面する未知の事物を解釈し、部分的に明らかかな事実をそれと関連して思い当たる諸現象で補充し、それらの事実の起り得る未来を予見し、それによって計画を立てる」と述べています。十分な知識があつてこそ、「目の前の患者を診る」という新しい経験に、適切に対応できるわけです。

同じように、われわれは、世の中のあるこれについての知識を持っていて、それを使って、現状を認識し、未来に向けた判断をします。知識は常に過去のものです。過去についての知識を組み合わせて現状を⑥分析し、未来に向けていろいろなことをする。これが知識の活用の本質です。そうすると、D学校の知というのは、そういう意味で意義がとてよく分かるわけです。無味⑤カンソウに見えるけれども、世界がどうなっているかという知識をみんなが勉強して、それを使って目の前の現実を解釈して、新しい事態への対応（新たな経験）に活かしていけるわけです。

(注1) オットー・フォン・ビスマルク —— ドイツの政治家（一八一五～一八九八年）。

(注2) ジョン・デューイ —— アメリカの哲学者、心理学者、教育思想家（一八五九～一九五二年）。

問一 傍線部①～⑤の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問二 【X】に最適な言葉を次の中から選び、記号を記しなさい。

- ア 一石二鳥 イ 二項対立 ウ 二律背反 エ 二束三文 オ 二転三転 カ 唯一無二

問三 傍線部A「身近なこれまでの自分の経験だけではどうにもなりません」とあるが、それはなぜか。その理由について述べた次の文の【 】に入る説明を簡潔に記しなさい。

個人の経験は、【 】
【 】ため、身近で経験できる範囲の外側にある問題や全く新しい事態にある問題に直面したときに、それだけでは対応しきれなくなるから。

問四 傍線部B「知識があるかないかで経験の質は違うということですか」とはどういうことか。筆者がどのように整理しているかを簡潔に説明しなさい。

問五 傍線部C「分析」の対義語として最適な言葉を次の中から選び、記号を記しなさい。

- ア 分解 イ 拡大 ウ 解釈 エ 統治 オ 総合 カ 経験

問六 傍線部D「学校の知」とあるが、「学校の知」の意義とはどのようなものか。あなたの考えを自由に記しなさい。